

【鱈ヶ沢町立鱈ヶ沢中学校区】

学校名	校長・氏名	担当者職・氏名
鱈ヶ沢町立西海小学校	校長 森山 智明	教諭 三橋 一栄
鱈ヶ沢町立舞戸小学校	校長 藤田 昭彦	教諭 青木 竜太
鱈ヶ沢町立鱈ヶ沢中学校	校長 相馬 治	教頭 新岡 省

I 校区の概要

鱈ヶ沢中学校区は、小学校2校と中学校1校があり、平成23年4月、それぞれが統合により（統合前は小学校7校、中学校2校）同時に開校となった。現在の児童生徒数は西海小77名、舞戸小213名、鱈ヶ沢中175名となっている。

1 各校の教育目標とめざす学校像

(1) 西海小学校

① 教育目標

「すべては子供の弾む笑顔のために～笑顔弾む西海小学校～」

② めざす学校像

「一人一人の児童が大切にされ、生き生きと活動している学校」

「教職員一人一人の専門性や持ち味が生かされ、創意工夫を大切にする学校」

「保護者や地域と連携しながら児童の育成に努める学校」

(2) 舞戸小学校

① 教育目標

「学び合う子 助け合う子 きたえ合う子」

② めざす学校像

「子どもが喜んで登校し、満足して下校する明るく楽しい学校」

「教師にとってやりがいのある学校」

「家庭・地域と心の通い合う学校」

(3) 鱈ヶ沢中学校

① 教育目標

「仲間とともに 未来を切り拓く」

② めざす学校像

「生徒一人一人を大切にする学校」

「自分の良さを発揮できる学校」

「生徒・保護者・地域・教職員が誇れる学校」



【鱈ヶ沢中学校校舎】

2 地域における連携の推進

(1) どの学校も以前から地域との結び付きが強く、令和2年度からはコミュニティ・スクールとして、地域、学校、行政が一体となって子どもたちを育てていく体制を構築している。

(2) 最近では「ふるさと学習」にも力を入れており、小中9年間を見通したカリキュラムを構築している。

(3) 校区には「鱈ヶ沢町小中連携推進協議会」があり、授業の公開、講演会の実施、各校の情報交換等を行っている。

II 研究の概要

不登校やいじめ等の未然防止に向け、教職員が児童生徒のために自己存在感や充実感を感じられる「居場所」をつくり出し、児童生徒が主体的に取り組む協働的な活動を通して「絆」を深めていく取組を、学

校の教育活動全体の中で計画的・組織的に行っていく。

1 すべての児童生徒に対する取組

不登校を未然に防止するために、すべての児童生徒が学校に行きたいと感じられるような「魅力ある学校づくり」を進める。

- (1) 学級や学校をどの児童生徒にとっても落ち着ける場所にするための居場所づくり
 - ① ペアやグループで協力して活動する学習を取り入れる。
 - ② 振り返りの場面において、一人一人の考えや意見を紹介し、互いのよさを認め合える場面を設定する。
 - ③ 児童生徒同士が主体的に学び合い、教え合うことができる集団づくりを行っていく。
- (2) すべての児童生徒が活躍できる場面を実現する絆づくりのための場づくり
 - ① 学校行事や委員会活動等を通して、児童生徒が主体的に取り組むことができる場や機会を設定する。
 - ② 他学級、他学年との交流学习を積極的にいき、児童生徒の健やかな成長につなげていく。

2 不登校児童生徒に対する取組

- (1) 全教職員で情報を共有し、不登校児童生徒の支援に当たる。
- (2) 不登校児童生徒及び保護者との対話を通して、望ましい支援の在り方を模索していく。
- (3) スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーとの連携を図り、ケース会議等を通して一人一人に対する支援の方針を定め、組織的に対応していく。

III 1年目の研究

令和2年7月の意識調査では、小学校、中学校とも「みんなで何かをするのは楽しい」という児童生徒の割合が高く、日頃の観察からも人間関係が比較的良好で、学校行事・授業でも協働する場面を取り入れやすい状況であった。「みんなで何かをするのは楽しい」と感じている児童生徒が多い点を生かし、グループ学習の形態を取り入れ、学び合い、認め合いながら、「授業に主体的に取り組むことができる児童生徒」「授業がよく分かる児童生徒」を増やすことを目標とした。また、小中連携の取組として、共通した「学習の5つの約束」をつくったり、学習の流れを示す共通の掲示物を活用したりすることで、小・中9年間を見通し、児童生徒が落ち着いて学習に取り組める環境整備を進めた。

令和3年1月には、京都産業大学の柴原弘志教授を招いて、「『特別の教科 道徳』における居場所づくり・絆づくり～聴き合い・語り合いの充実から考える～」と題した講演会を行った。

試行錯誤の1年目であったが、PDCAサイクルに基づく意識調査を年3回、定期的を実施することによって、子どもたちの声を手がかりにしながら研究を進めることができた。ただ、本調査研究に対する教員の理解に差がみられ、担当者任せになりがちだった点と、小中が連携した体制づくりが若干曖昧なままだったことが課題として挙げられた。

IV 2年目の研究

2年目を迎えるにあたり、4月当初、新しく赴任してきた先生も交えて、2年目のプラン及び、年間目標達成への手立て（I期）を昨年度の振り返りをしながら作成した。全学年とも「みんなで何かをするのは楽しい」という児童生徒が多い点を生かし、1年目からの継続で、グループによる学習形態を取り入れ、学び合い、認め合いながら、「授業に主体的に取り組むことができる生徒」を増やすことを目標とした。また、小中連携を一層強化するために、年3回担当者会議を行い、意識調査の結果を踏まえた情報交換と研究の進捗状況について報告し合った。各校及び鱈ヶ沢町小中連携推進協議会の、年間を通した取組を抜粋して紹介する。

1 各校の主な取組

3校とも共通しているのが、児童生徒の主体性を伸ばすために様々な取組を意図的・計画的に積み重ねていったことである。授業、委員会活動、学校行事等、教育活動のあらゆる場面で、仲間との絆や社会性を育む取組を、可能な限り実践することができた。

(1) 西海小学校

- ・対話を通して児童を理解するとともに、児童に任せられるところは任せ、自分たちで話し合って実行できたという達成感を味わわせる。
- ・自力解決の時間を十分確保し、自分の考えをしっかりとって話す機会を設定する。
- ・ペアやグループで協力して活動する場面や、教え合う場面を設定する。
- ・振り返りの場面を設定し、友達の考えのよさや頑張りについて発表させるようにする。
- ・宿泊学習では、自分の思いも大切にしながら仲間と協力できるように、計画や実際の活動場面での話し合いを大切にしていく。
- ・揺さぶりの発問を意識し、児童の思考を高めさせながら、意見を言いたくなるような授業展開をする。
- ・授業で「17 (いいな) タイム」と称して、理解した児童がわからない児童に教えてあげる時間を設定する。そして、集団での学びが、授業に臨む主体性及び意識の向上につながるようにする。



(2) 舞戸小学校

- ・授業の中で、グループで協力して解決したり説明し合ったりする場面を設定する。
- ・主体的な学習の構築をめざし、子どもたちの言葉で課題を設定させ、まとめを考えさせる。
- ・卒業式や6年生を送る会のねらいや意義を教え、個人個人にめあてをもたせて取り組ませるとともに、子ども同士が関わる場や子どもたちに任せる部分を設定し、成就感や満足感をもたせる。
- ・新入生歓迎会や運動会を良い機会と捉え、下学年に教える交流学习を設定し、教育活動を充実させる。
- ・修学旅行の事前活動（自主見学の計画等）や当日の活動、学習発表会（修学旅行の報告）に向けた活動を通して、みんなで協力してやり遂げることの喜びを味わわせる。
- ・縦割り班清掃やMキッズ集会において、下学年に教えたり、頑張り認めたりする場面を設定することで、他学年との交流を深めさせ、リーダー性を育てる。



(3) 鱈ヶ沢中学校

- ・授業を通して全ての生徒の居場所をつくり、充実感や達成感を味わえるようにする。「ディスカッション・トレーニング」の取組を通して、「進んで自分の考えを話す」場面を多く設定する。
- ・教師と生徒、生徒同士で「いいねカード」を使って感謝の心を伝え合い、互いの信頼関係を構築する。
- ・委員会活動、学校行事等を通して、生徒が主体的に取り組むことができる場や機会を設定し、生徒同士の絆を深めていく。
- ・「ペア活動」「グループ活動」等の工夫を通して、「互いの考えをわかりやすく伝え合う生徒」を育成する。
- ・学校生活のあらゆる場面で、相手の立場を尊重し、互いを認め合う人間関係の構築を目指す。
- ・特に3年生は、これまでの取組を振り返りつつ、未来を切り拓く人になるためにどのようなことを意識し、行動していくかについて考えさせ、発表させる。
- ・年間を通して「心を磨く3活動（挨拶・清掃・合唱）」の充実を図る。特に合唱活動には力を入れ、校内合唱コンクールでは、「競い合う合唱ではなく、高め合う合唱を！」を合い言葉に、生徒達は素晴らしい合唱を披露した。



2 鱒ヶ沢町小中連携推進協議会での取組

- ・9年間の学びを一体のものにするために、小・中学校の連携を一層強化した。
- ・令和3年度は、特に「居場所づくり・絆づくり調査研究事業」の研究を推進する組織として事業を行った。
- ・令和3年7月には、弘前市教育センターの小笠原恭史所長を招いて、「『絆がつくる居場所づくり』～不登校の理解と『対策』～」と題した講演会を行った。
- ・令和4年1月には、全体及び各部会別に研修会を行い、生徒指導部会では小6児童と中1生徒の状況報告や不登校児童生徒への対応を中心に、研修部会では、3校共通の学習アンケート結果報告や居場所づくりを意識した授業改善について、活発な話し合いが行われた。

V 成果と課題

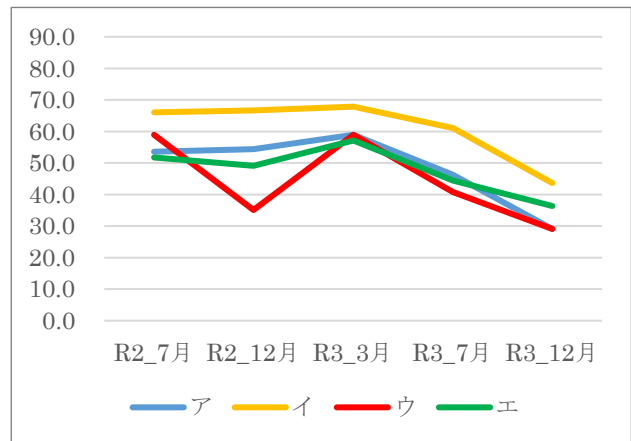
1 意識調査の分析及び考察

意識調査の結果から、特に2回目（令和2年12月実施）と5回目（令和3年12月実施）の数値の変容について分析と考察を行った。なお、小学校の数値は2校の数値を合わせたものである。

ア 学校が楽しい イ みんなで何かをするのは楽しい
ウ 授業に主体的に取り組んでいる エ 授業がよくわかる

【小4→小5】

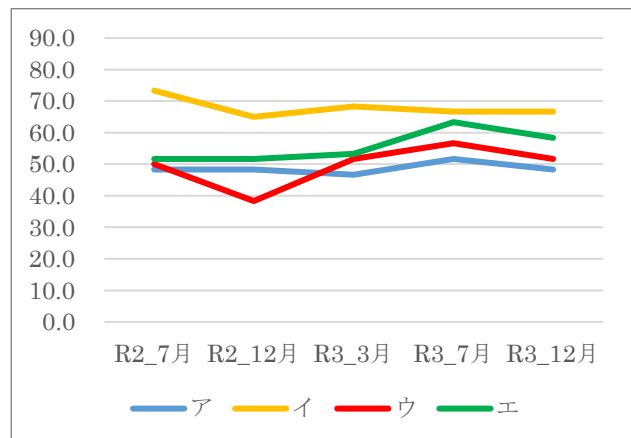
	R2_7 月	R2_12 月	R3_3 月	R3_7 月	R3_12 月	
ア	53.6	54.4	58.9	46.3	29.1	↓↓
イ	66.1	66.7	67.9	61.1	43.6	↓↓
ウ	58.9	35.1	58.9	40.7	29.1	↓
エ	51.8	49.1	57.1	44.4	36.4	↓↓



全体的に数値の低下がみられる。2学期末は新しく学習する内容が多く、難易度があがるため、「エ 学習がよく分かる」が落ちてしまい、そのことが他の項目にも影響していたのではないかと考えられる。

【小5→小6】

	R2_7 月	R2_12 月	R3_3 月	R3_7 月	R3_12 月	
ア	48.3	48.3	46.7	51.7	48.3	
イ	73.3	65.0	68.3	66.7	66.7	
ウ	50.0	38.3	51.7	56.7	51.7	↑↑
エ	51.7	51.7	53.3	63.3	58.3	↑

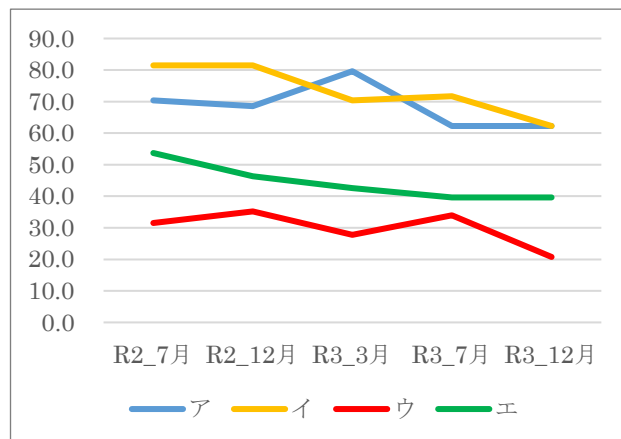


「ウ 授業に主体的に取り組んでいる」と「エ 授業がよくわかる」の数値が上昇傾向にある。授業では児童同士で教え合う時間を設定したり、運動会や修学旅行等の行事でも、最高学年の自覚をもたせなが

ら様々な取組を行ったことが、児童の主体性を高めたのではないかと考える。

【小6→中1】

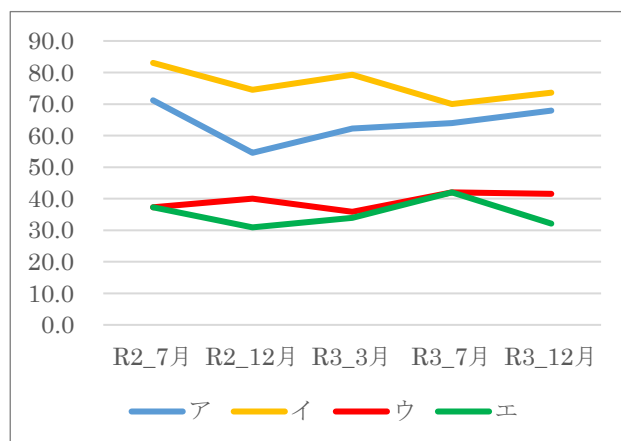
	R2_7 月	R2_12 月	R3_3 月	R3_7 月	R3_12 月	
ア	70.4	68.5	79.6	62.3	62.3	↓
イ	81.5	81.5	70.4	71.7	62.3	↓↓
ウ	31.5	35.2	27.8	34.0	20.8	↓↓
エ	53.7	46.3	42.6	39.6	39.6	↓



全体的に数値の低下が見られ、特に重点項目である「ウ 授業に主体的に取り組んでいる」の低下が著しい。調査時期が12月上旬ということもあり、学習内容の難しさもあったと思うが、生徒個々の意識に大きな差がみられたのではないかと考える。

【中1→中2】

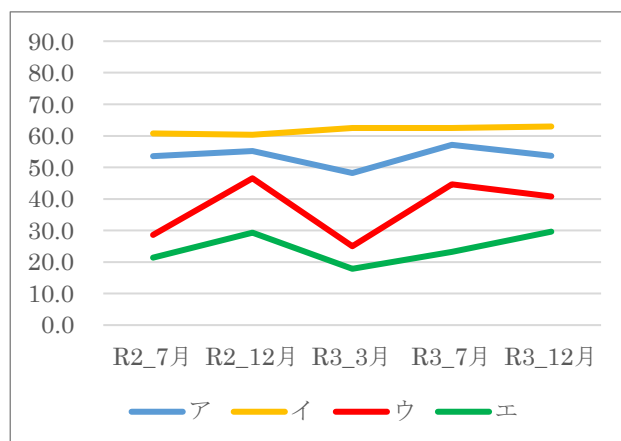
	R2_7 月	R2_12 月	R3_3 月	R3_7 月	R3_12 月	
ア	71.2	54.5	62.3	64.0	67.9	↑↑
イ	83.1	74.5	79.2	70.0	73.6	
ウ	37.3	40.0	35.8	42.0	41.5	
エ	37.3	30.9	34.0	42.0	32.1	



充実した学校生活を送っている生徒が多く、「ア 学校が楽しい」の項目が上昇傾向にある。また、「ウ 授業に主体的に取り組んでいる」の数値も若干の上昇がみられる。「ペア活動」「グループ活動」等の工夫を通して、互いの考えをわかりやすく伝え合う生徒が少しずつ増えていることが要因として挙げられる。

【中2→中3】

	R2_7 月	R2_12 月	R3_3 月	R3_7 月	R3_12 月	
ア	53.6	55.2	48.2	57.1	53.7	
イ	60.7	60.3	62.5	62.5	63.0	
ウ	28.6	46.6	25.0	44.6	40.7	↓
エ	21.4	29.3	17.9	23.2	29.6	



「イ みんなで何かをすることは楽しい」「エ 授業がよくわかる」の数値は上昇傾向にあるが、「ウ 授業に主体的に取り組んでいる」は前年同期より低下している。それでも、5回分の調査全体をみていくと、全体的に、若干ではあるが上昇傾向にある。特に最高学年という自覚もあってか、学校の教育活動全体を通して、様々な場面で下級生をリードする姿が十分にみられた。

2 成果

- (1) 児童生徒の主体性を伸ばすために、様々な取組を意図的・計画的に積み重ねていったことによって、児童生徒が主体的に「教え合う」「学び合う」雰囲気づくりができていた。
- (2) 本調査研究に係る教職員の意識に向上がみられた。どの学校も児童生徒が安心でき、自己存在感や充実感を感じられる場所をつくり出し、児童生徒の絆づくりに寄与していた。

3 課題

- (1) 全体的に数値が低下している学年もあるので、その要因が何なのか、どのように改善を図っていけばよいかを具体的に検証し、取組の質を上げていく必要がある。
- (2) 「ウ 授業に主体的に取り組んでいる」の数値が目標値まで届かなかった学校、学年がほとんどだったので、本調査研究を通して行った様々な取組を振り返り、再度構築していく必要がある。

4 調査研究のまとめ

【令和3年度 長期欠席者（欠席30日以上）の状況】

西海小	小4	小5	小6
新規数	0	1	0
継続数	0	0	0

舞戸小	小4	小5	小6
新規数	0	0	0
継続数	0	2	1

鱈ヶ沢中	中1	中2	中3
新規数	1	1	1
継続数	0	7	2

(令和3年度児童生徒指導状況報告書「4月～12月」より)

令和3年度の不登校児童生徒の状況は上記のとおりである。2学期終了時の数値ではあるが、この時点で新規の不登校児童生徒は3校合わせてわずか4名に抑えることができている。これは本事業のねらいのとおり、全ての教職員が、全ての児童生徒を対象に、授業や行事等全ての教育活動における集団指導を丁寧に行うことを約2年間続けてきた成果であると考えている。また、本事業を通して、教職員の同僚性及び不登校に対する意識が高まったことにより、継続の不登校児童生徒への支援においても、ケース会議を開いたり、外部機関との連携を模索したりするなど、学校としての組織的対応が活性化された。その甲斐あって、継続数に含まれている児童生徒の中には、2学期中頃から学校生活に復帰し、教室と別室での学習を並行して行っている生徒もおり、これまでの地道な取組の成果が表れたと考える。

最後に、2年間にわたる本研究事業は今年度で終了となるが、この事業に関わったすべての教職員が、様々な知見を得ることができた。これからもまた、不登校の未然防止に向け、目の前のすべての子どもたちが授業や行事、学校生活に安心して参加できるように、主体的な活動を通してそれぞれの絆を紡ぐことができるように、魅力ある学校づくりを学校全体というより、鱈ヶ沢中学校区全体で取り組んでいく所存である。